

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 3月31日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22560614

研究課題名（和文） 有明海沿岸地域における干拓村落の形態多様性とその要因に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Diversity of Village Forms in Reclaimed Land on the Ariake Coast

研究代表者

菊地 成朋（KIKUCHI SHIGETOMO）

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：60195203

研究成果の概要（和文）：

本研究では、有明海沿岸地域の干拓村落を対象として、開発の計画原理と形成・変容プロセスの分析を行った。それにより、多様な村落形態が生まれる背景を明らかにした。

有明海沿岸地域における多様な干拓村落の形態は、近世の異なる開発主体の性質を反映するものであるとともに、限られた資本や技術といった諸条件のもとで行われた居住地選定と耕地拡大、それぞれの合理的な解として説明できる。つまり、開発時の計画というよりもむしろ、村落形成から変容に至るプロセスの中で後発的に獲得されてきたものである。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we analyzed the planning principle and formative process of reclaimed villages by case study on coastal area of the Ariake sea. Consequently, we clarified the primary factor of the diversity of reclaimed villages.

The diversity of reclaimed villages in the Ariake coast reflects the character of reclamation works in the early-modern times. In addition we realized a cause and effect relationship among several factors technical development, agricultural policy and dwelling system. In short, the diversity of reclaimed villages was formed by formation and changing process but not initial plan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：建築計画

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：干拓集落，空間構成，形成過程，居住，有明海沿岸

1. 研究開始当初の背景

有明海沿岸地域では、低平地に形成された干拓集落という共通の地理的条件を有しながら、様々な形態の集落が併存している。こ

れまで、有明海の干潟や生態系の共通したイメージに対し、このような村落形態の多様性については一般的に認識されてこなかった。

当該地域については、地理学や歴史学など

の分野に豊富な研究蓄積があるが、そこでは、干拓にまつわる地理特性に注目した研究が中心であり、農地の形成過程に視点が向けられ、居住地についてはほとんど扱われていない。一方、当該地域の居住空間を扱った研究は、建築学分野において試みられているが、集落と干拓との関連については成果が薄く、その体系的把握には至っていない。

研究代表者は、十数年来、九州の集落について広域的に検討を行ってきているが、当該地域については、2004年から柳川市の文化的景観事業(文化庁)の委員として集落景観の分析を担当したことが本研究の直接的契機となっている。その際に、鱗状干拓にともなう列状集落が文化的景観の検討対象となり、応募者がその分析を行うことになった。そして、新規干拓に派生して旧堤防上に集落が段階的に形成されていくプロセスを明らかにした。しかし、視点を有明海沿岸全域に広げれば、このような列状の集落形態はこの地域の干拓集落として必ずしも一般的なわけではない。佐賀や小城では塊状の村落形態が見られ、また福富町ではいわゆる散居の村落景観が展開する。このような有明海沿岸地域の村落形態の多様性は何に起因するのか、その解明が今回の研究課題である。

2. 研究の目的

本研究は、日本最大の干満差を有する有明海沿岸地域において多様な展開を見せる干拓村落を対象とし、開発に関する計画原理を読み解くとともに、形成・変容のプロセスを明らかにしようとするものである。一括りに干拓村落といっても、有明海沿岸地域においてその形態は多岐にわたる。いずれも農耕を生業とする村落でありながら、列状村、小規模塊村、大規模塊村、そして散居村といった様々な形態が併存しており、それぞれ特有の地域景観をつくり出している。本研究では、そうした村落形態の違いを生む背景を明らかにすることによって、有明海沿岸地域において行われた干拓と集落形成の本質に迫ることを意図している。

3. 研究の方法

本研究は、マクロな視点にもとづく広域的な分析とフィールドワークによる事例検討という異なる2つの手法を用いた調査を実施した。まず、マクロ分析では、有明海沿岸地域を対象とし、その空間特性・変容プロセスに関する横断的な分析を試みた。また、事例検討では、柳川の列状集落の分析により得られた知見をもとに、巨大塊状村・散居村・小規模塊状村という特徴的な3形態を取り上げ、詳細な集落空間の読み取りを行った。最後に、得られた情報を重ね合わせ分析を行った。

1) マクロ分析

マクロ分析を実施するにあたり、当該地域に関する基礎情報収集を実施した。それぞれの地区で得られる情報の内容や量には片寄りが考えられることから、収集した史資料及び情報を共通の視点により整理し、内容・項目毎に集計を行った。さらに、地図資料の分析により干拓にともなう各地区の時系列的変遷を明らかにし、文献史料との対応からその計画意図と、開発手法に関して地区毎の整理を行った。また、それらの情報を視覚化し図や表としての表現を試みた。

2) フィールドワークによる事例検討

対象を、佐賀市川副町の犬井道集落(巨大塊状村)、小城市芦刈地区(小規模塊状村)、白石町福富地区(散居村)とした。それらを対象に、以下の実地調査を行った。

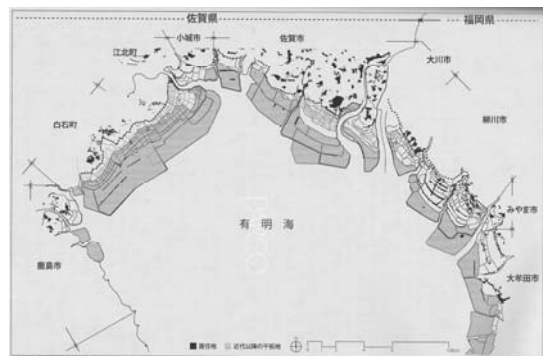
- ・対象事例に関する史資料の収集：成立から現在に至る変容プロセスの整理
- ・屋敷図採取及び現状集落図の作成：空間構成要素の整理
- ・土地所有関係の整理：居住と干拓にまつわる関連性の一体的把握
- ・居住者に対する聞き取り：実際の生活に関わるオーラル・ヒストリーの収集

これら3地区に、既に分析を行っていた柳川市両開地区の列状村の事例分析を加え、4事例の相互比較を行った。

4. 研究成果

1) マクロ分析

同じ有明海沿岸部に立地しながら、塊状村や列状村や散村などの多様な集落形態がみられることが確認された。さらに、柳川藩と佐賀藩とでは村落形態に明らかな差があることがわかった。

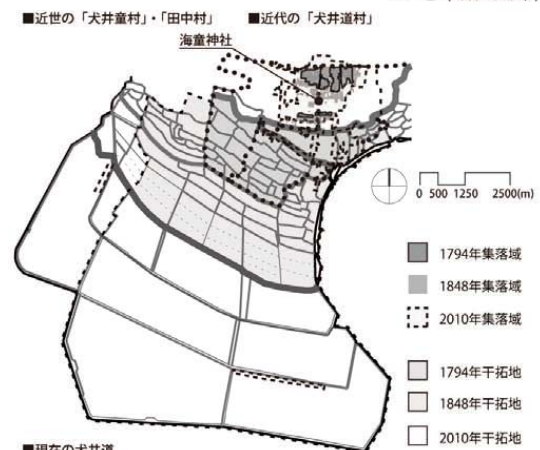
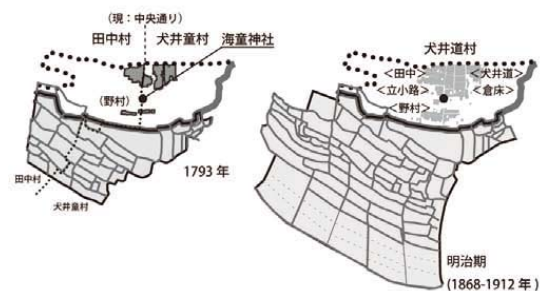
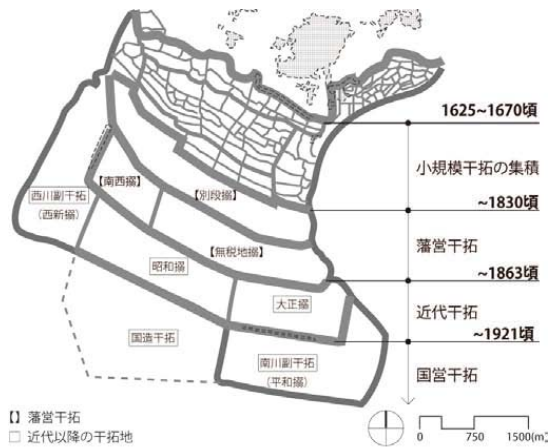


有明海沿岸地域

2) 巨大塊状村犬井道集落

犬井道の立地する川副地区では、この地が城下町直下であることから近世後期に藩主導の大規模な干拓が行われ、それに伴う人口増加によって分村が発生し、さらに集落の隙間を埋める形で居住域が発展したこと、また、明治期に至ってそれが一層拡大し、巨大塊村としての犬井道集落が形成されたことなど

が明らかになった。佐賀藩では、村受干拓によって増反型の農地拡大が行われており、入植による新しい集落は形成されず、代わりに旧来の集落が膨張したと考えられる。また、構成員の所有地をみると、1つの集落の所有耕地がまとまらず、複数の鱗状農地に分散するが、これは当地の開発が村受干拓であることによって農地が事業の度に参加農民に均等配分され、その所有が継承されたためと考えられる。居住域の空間構成を見ると、明治期に成立した屋敷地であっても、古い屋敷と同等の屋敷構えが獲得されている。これは、拡大期の社会関係を示唆する傾向であるとみられる。

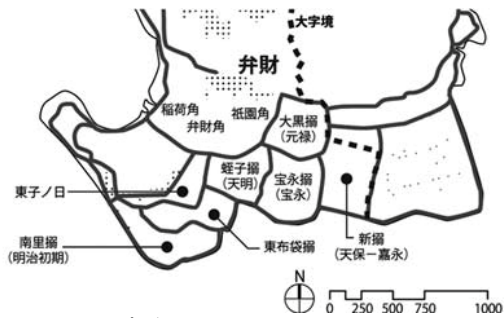


川副地区の干拓の進展と犬井道集落の拡大

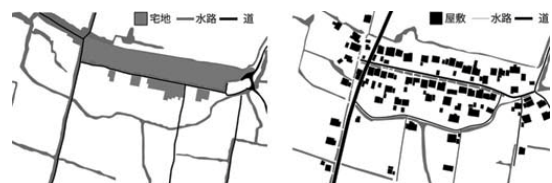
3) 小規模塊状村芦刈地区

近世初期の松土居築堤により耕地が安定化し、その内側の旧堤防微高地上に集落が形成

されたと考えられる。その後、松土居のさらに海側に鱗状干拓地が展開していったが、この部分には集落は形成されなかった。干拓によって生産が拡大され、それに伴って松土居陸側の小規模集落群の屋敷数も増加した。その際、当初は旧堤防上に列状に形成された集落が、塊状に変化した過程が明らかとなった。

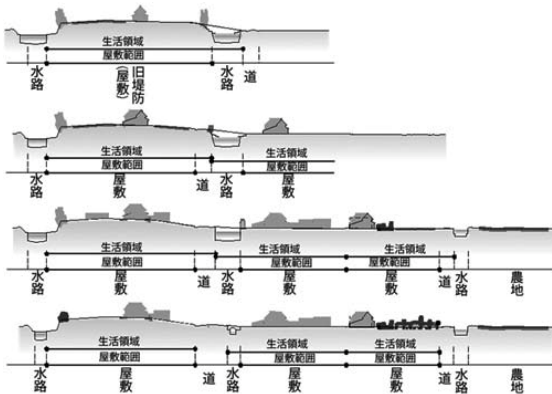


芦刈地区の干拓年代



近世期の弁財集落

1960年代の弁財集落



弁財集落の拡大過程

4) 散居村福富地区

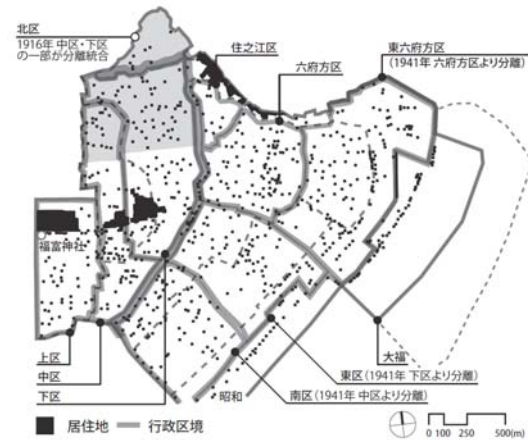
近世初頭においては必ずしも散居が展開していたわけではなく、むしろ集村が主流であったこと、近世後期以降に散居が普及していったこと、そのプロセスが当該地域特有の水利条件のもと佐賀藩が行った干拓事業とその後の改変によってもたらされたことが明らかになった。

さらに、典型的な散居形態をとる福富北区を対象に、集落空間構成に関する詳細調査を行った。その結果、圃場整備以前は各家がウラボリに雨水を溜めて水源としていたこと、生産と生活の水をこの個別の水源に頼っていたこと、ただし相隣間ではウラボリの共同利用がみられ、用排水の仕組みも小規模な単位で一定の秩序が形づくられていたことがわか

った。これらは、散居形式が藩の政策などマクロな計画意志によって生み出されたのではなく、個別の営みの集積として形成されていたことを示すものである。



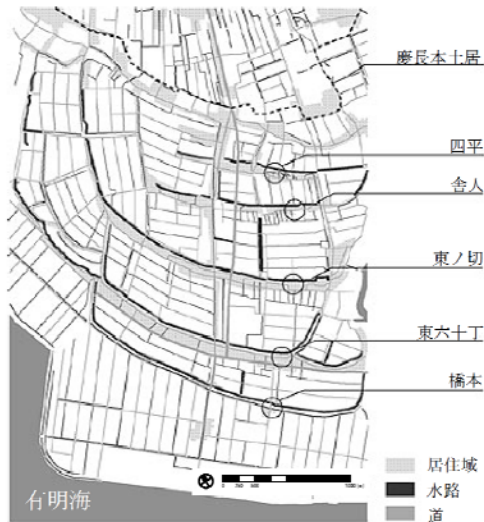
近世の福富地区



1940年代の福富地区

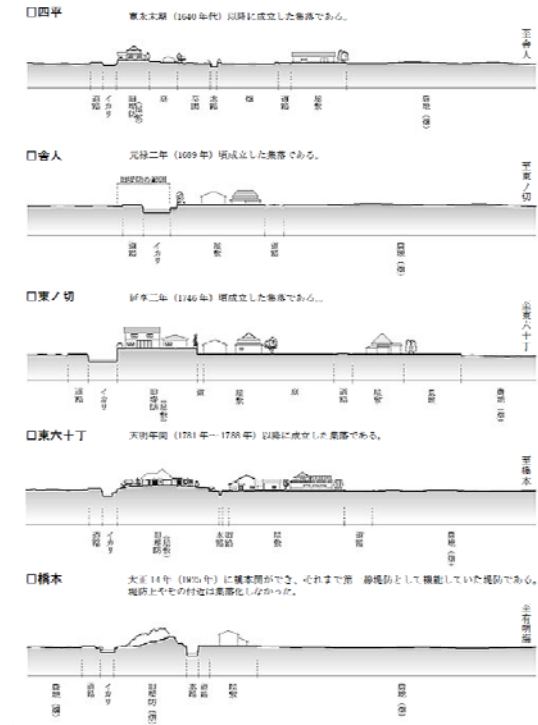
5) 4地区の比較

上記3地区に、以前に調査研究を行った柳川市両開地区を加えて総合的考察を試みた。それによって、両開：列状村、犬井道：巨大塊状村、芦刈：小規模塊状村、福富：散居村と、有明海沿岸部の干拓村落の形態が多様である理由について一定の見解を得た。それは、



両開地区

藩の農政の違い、微地形微気候および水利条件の違い、生業の違いなど、さまざまな要因が重なり合うことによって生み出されているといえる。



両開集落断面図

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3件)

①牛島朗, 菊地成朋, 松下藍子, 福富地区における散居村の成立 有明海沿岸地域における干拓村落の空間特性に関する研究 その6, 日本建築学会学術講演梗概集, 2012. 9. 12, pp. 17-18

②松下藍子, 菊地成朋, 牛島朗, 入江奈津子, 水利用からみる散居村福富北区の空間特性 有明海沿岸地域における干拓村落の空間特性に関する研究 その7, 日本建築学会学術講演梗概集, 2012. 9. 12, pp. 19-20

③牛島朗, 菊地成朋, 犬井道集落の拡大と干拓進展 有明海沿岸地域における干拓村落の空間特性に関する研究 その5, 日本建築学会学術講演梗概集, E-2, 2011. 8. 25, pp. 609-610

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 成朋 (KIKUCHI SHIGETOMO)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号：60195203